

「後日談・ブラックボックス」

※作品、キャラクターに関するネタバレが多分に含まれています。本編視聴後十おまけSS「巣箱」「薄氷」の読了後の閲覧を推奨します。

ピピピ。ピピピ。電子的な音が鳴る。音のやかましさに思わず目を開けると、部屋の煌々とした明かりに目がくらんだ。

どうやら自宅のソファに座って明かりを付けたまま眠りに付いてしまったようだ。

床には文庫本が一つ転がっていて、僕はそれを起きたてのぼんやりとした頭でぼーっと眺めた。それから数秒、その本が兄の物だということに気が付いて慌てて拾い上げる。次に、アラームの音量が徐々に大きくなっているケータイを手に取り停止させる。ケータイの画面上では午後九時を指し示していた。

「あ、そろそろ時間か」

僕はゆっくりと上体を起こし起き上がり、ウォーターサーバーからガラスのカップに水を注ぐ。ウォーターサーバーの横の棚に置かれた葉袋を開け、葉のシートを二つ：向精神薬と睡眠薬を親指で押し出し、口に放り込む。いつもの習慣だ。

(結構寝ちゃってたなー：)

仕事で疲れて帰ってきてきてご飯を適当に済ませて、兄から借りた本を読んでいたら意識が遠くなっていた：ような気がする。

またソファまで戻り、もう一度文庫本を手取る。本にはスピンも栞も挟んでいなかった。どこまで読んだのか分からなくなっていたのでパラパラと本をめくる。どう考えても多少は読んでいたはずなのだけれど、序盤のページを見てもピンと来ない。きつとうとうとしながら流し読みでもしていたのだろう。

(諦めて最初から読むか)

表紙を開き題字を見たところで、ふとあの子の顔が頭によぎる。

「……」

数日前、あのおかしな部屋で起きた出来事…。あれは本当に現実だったのだろうか？夢で

はなかつたんだらうか。

僕は思い返す。

丁寧は丁寧に。

あの子がいけないこの部屋で、あの子を鑑賞するように。

*

『君、よく保健室に通っている子じゃない？』

咄嗟によく言えたものだ、我ながら名演技だった。僕は自嘲気味に笑う。どれだけ僕があの子のことを好きなのか、いつから目で追いかけているのか、自分がよく分かっているのだから。白々しいセリフを言って、丁寧は自己紹介までして、保険をかけるにはやりすぎてしまった感じは否めない。

僕があの子に名前を伝えて僕のことを思い出してくれなかったら、僕は一体どういう反応をしてしまっていたのだらう。まだ葉が効いていた時だったから耐えられたのかもしれないな

いけれど、もし少しでも理性が効いていなかったらと思うとゾツとする。

一つ目の部屋のことを思い返そうとすると、下腹部に妙な熱を覚えてしまうのはとうに分かりきっていたことだ。あの部屋では一人で自慰をして、あまつさえあの子に手伝わってもらっていたのだから。

（最終的に最後まですることになったとはいえ…、あれは…今思い出しても…）
俗に言う、「使える」というやつだ。

例えあれが夢であったとしても夢でなかったとしてもどちらでも構わない。あの子に自慰を手伝ってもらえるなんて、それこそ夢のような話なのだから。

自分の置かれた状況に若干焦っていたとはいえ、首と手の自傷痕を見せたのは悪手だった。自分が自分の最期を決めるのに躊躇いは無いくせに、いざ自分の外の力によって命を落としてしまいかねない状況には動揺してしまうなんて、僕もつくづく弱い人間だ。

しかし、結果として良かったのかもしれない。あの子にとっては、もしかしたら嫌な思いをしたのかもしれないけれど。

僕の全てをあの子に知ってもらいたい、知られたい、知られた上で受け入れてほしい。こ

れは…こじれた承認欲求なのかもしれない。

『受け入れてほしい、なんて言わないから、どうか僕の体の傷のことは気にしないでくれるかな？』

僕は本当に嘘をつくのが上手だ。そんなこと微塵も思ってもいなくせに。嫌われたくないからって、その場限りの都合のいいことを言っただけで、気に入られようとするなんて。

『これは僕だけの問題で、このことで君に迷惑をかけたりはしたくないから』

…まあ、この言葉は本心そのままだったけれど。三十路…あの子から見たらおじさん中のおじさんの年齢の人間が、自分の面倒を他人…それも好きな子に迷惑を押し付けるのはいくら心を病んでいる自分でも恥ずかしい、申し訳ないという気持ちはあるのだ。

(最終的に面倒も迷惑もかけちゃったんだけどさ！)
思わず頭を抱えてしまう。ああ、本当に僕は悪い子だ。

最後の部屋は…正直ぼんやりとしか覚えていない。

キスをして、葉が切れて、セックスをして…。要所要所では覚えているのに、鮮明に思い

出そうとすると頭にモヤがかかってしまう。「そういうことがあった」という事実だけが頭に残っているだけなのもどかしい。

きつと、自分がコントロールできないくらいに暴走してしまっていたのだろう。

(あそこまで精神状態が悪くなったのっていつぶりだろう。薬を切らすことなんてまずないからなあ…)

もし鮮明に覚えていたら、その記憶で何度も自分を慰めていたに違いない。

最後の部屋に現れた扉の先は見たことも訪れたこともない寂れた神社だったが、境内を出ると僕の車が鍵をかけられていない状態で道路に駐車されていた。

車上荒らしにあったわけでもなく、鍵も車内にあったからほっと胸をなでおろしたけれど、僕が覚えていないだけで、おかしい部屋で倒れている前に神社に訪れていたのだろうか…？

それから僕は車であの子を家に送り届ける運びとなった。

『家ってどこかな？もしよかったら…住所、カーナビに打ち込んでくれる？』

と、住所を知っているというのに(何なら彼女の家の前まで車を走らせたというのに)白々しい嘘をつき、あの子がたどたどしい動作で住所をナビに打ち込んでいる隙に向精神薬を

鞆から取り出し飲んでいた。

車を運転する時は平常心で。イライラしたり気分が落ち込んだりする時は運転しない。自動車学校の教官から受けた指導を律儀に守る僕なのであった。

僕が車を走らせている最中、あの子はずっと顔を赤らめていた。

その頬の色がどうにも僕の心をくすぐってしまって、つい、ほんの少しだけ意地悪をしてしまいたくなったのだ。

「どうしたの？車の中、暑い？」

あ、いえ、と小声で彼女は言う。

赤信号。僕は車を停止させ、彼女の顔を威圧感を与えないよう横目で見た。

彼女は唇を数回パクパクと小さく動かしたと思うと、ギリギリ聞き取れるくらいの声で。

あんなことをしてしまって、先生のこと、どういう目で見ればいいのか分からなくて。

(ああ、とても可愛いなあ…)

心の声が思わず漏れてしまいそうになったが、グッと堪えた。

「してしまつて……って、君は何も悪くないんだよ。僕が悪いんだから」

そう、僕が全面的に悪いのだ。

おかしな部屋に閉じ込められた理由や原因は考えても答えが出てこないものの、少なからず彼女にしてしまったことは……歯止めが効かなくなった僕のせいなのだ。

「寧ろ……君は嫌だと思わなかったの？」

僕は彼女の答えを待たずに矢継ぎ早に言う。

「僕からこんなことを言うのはとてもあれだけれど……今回の件は僕のことを嫌いになつても、それこそ殺したいくらい憎くて恨んだとしても、しょうがないことだと思ふよ」
(君に「死ね」と言つてもらつて死ぬるなら、本望さ)

彼女は小さな頭を横に振る。

違います、違ふんです。

彼女の、柔らかく熱を帯びた瞳が僕に向けられる。

ストックホルム症候群。

急に、僕の頭にその言葉がよぎつて、またあの部屋にいた時みたいに感情がコントロール

できなくなつてしまひそうな程動揺してしまつた。

(…本當なら、嬉しいはずなのに)

信号が青になる。僕は視線を正面に戻し、ブレーキペダルから足を離してアクセルペダルをゆっくりと踏む。

(いや、僕の考えすぎ…かな)

どうにも不安になつてしまつて、居ても立つても居られず彼女をまた横目で見る。

彼女は耳まで顔を赤く染めながら、今にも泣き出してしまひそうな表情でスカートを両手でぎゅつと握りしめていた。

僕は無言で左手を彼女の方に向かつて伸ばし彼女の両手をそつと包んだ。

彼女は少し驚いたものの、決してそれを拒みはしなかつた。

彼女の家に着くまでの僅かな間だけ、彼女とまた繋がることのできたのだ。

あの子を家まで送り届け、玄関のドアを開け家に入るまで見送っていると、ケータイから着信音が鳴つた。画面を見ると兄さんからの電話だつた。適当なところに車を移動させ駐

車をし電話に出た。

「もしもし、花鶏？」

「花鶏」という名前を聞き現実引き戻された。自分の本名だというのに、何度呼ばれても慣れないものだ。

「あ、うん、兄さんどうした？」

「どうしたって…。今日本返しに来るって花鶏からメールくれただろう？いつまで経っても来ないから心配になって電話したんだが…」

「へ？」

思わず間拔けな声が出る。記憶にない。メールの送受信ボックスを開き確認すると、確かに兄にメールを送っていた形跡があった。

「え、嘘ごめん。忘れちゃってみたい…？」

「おいおい冗談だろう、花鶏が俺にメールを送ってきてから半日どころか数時間くらいしか経ってないんだぞ。もしかして何かあったのか？」

「…へ？」

またしても間拔けな声が出た。色々ありすぎて、全く気にも留めていなかったが少なからずあの部屋には数日はいたはずだ。薬の効果が完全に切れたのが何よりの証拠だ。だが、ケー

タイの画面もカーナビの画面も見覚えのある日付を示している。

「まあいい、詳しくは後で聞くからとりあえず家に来なさい。晩御飯も用意してあるから。燕なんてお前が来ないから腹を空かせて待ってるんだぞ？ああ見えて根はいい子だから花鶏のことを心配してるんだからな、会ったらちゃんと喋ってあげよ？あ、そうだお前ちゃんとは葉は飲んでるんだろ？まさか通院をサボってるんじゃない？」

「あーもう分かった分かった！今行くから！ちょっと待ってて！」

通話終了ボタンを押す。やれやれ…、やけに心配性な血の繋がらない兄を持ったものだ。

*

「さてさて：一服一服」

あの子が側にいない寂しさを紛らわせたところで僕はタバコとライターを持ってベランダに出る。タバコを吸うなんて何日振りだろう。ニコチン、煙、唇の寂しさを目一杯感じ、深呼吸をするようにタバコを吸う。

「しかし、恥ずかしいところを見せてしまったな…」

紫煙をくゆらせながら独りごちる。

「薬を飲んだら大分落ち着いたけど、さ」

左腕の袖をまくり、一点を見つめる。あの子が貼ってくれた、傷の大きさに見合わない小さな絆創膏。

「一生剥がせないかも」

思わず顔が綻ぶ。運動会のかけっこで一位を取った子が首に下げてもらおうメダルのような、嬉しいような、誇らしいような、そんな気分させられた。

一本目のタバコが終わりを迎えつつあり名残惜しい気持ちになっていたら、睡眠薬が効いてきたのか頭と体が優しく重くなっていく。

「そろそろ寝ようかな」

あくびを一つし、ベッドに潜り込む。

あの子の顔を思い浮かべながら、子供の頃から使っているタオルケットを強く抱きしめる。

(……)

枕元に置いているケータイを手に取り、アドレス帳を開く。

(こんな時間に電話をかけたら迷惑だよな)

葉の効き目はバツチリなようだ。僕はケータイを伏せ、元あった場所に置いた。

(あの子のこと、ちょっと前までは遠くから見守ってるだけで充分我慢できて、好きだという気持ちを抑えられたんだよな)

自心の強さというよりは、葉の存在が大きいのかもしれないけれど。

僕は左腕に貼られている絆創膏をそっと撫でる。あの子は自傷痕…心の傷痕をいとも簡単に触れて、塞いでくれようとした。

(ありがとう…)

僕は彼女の顔を思い浮かべながら、ゆっくりと眠りに落ちた。